様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０３７３

研究課題名（和文）集団間紛争における賞賛と排斥の集団内力学

研究課題名（英文）intragroup dynamics of praise and exclusion in intergroup conflict

研究代表者
縄田　健悟（Nawata, Kengo）

九州大学・持続可能な社会のための決断科学センター・講師

研究者番号：３０６３１３６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，集団間紛争における集団内評価の力学の解明を行った。集団内評価の力学には，賞賛獲得と排斥回避という２つの方向性が考えられ，それぞれ検討した。賛獲得に関しては，比較文化データベースを用いて名誉文化，戦士への賞賛，戦争頻度の関連性を検討した。排斥回避に関しては，日中関係を題材に，対日態度表出を検討した。一連の研究から，賞賛獲得と排斥回避がともに集団間紛争を激化させることが示された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clear out intragroup dynamics of reputation in intergroup conflict. The intragroup reputation dynamics have two phases: praise gain and exclusion avoidance. To examine the effect of praise gain, the relation between honor cultures, praise to warrior was analyzed using cross-cultural database, and I conducted survey expression of attitude toward Japanese in China to investigate the effect of rejection avoidance. These studies demonstrated that both praise gain and exclusion avoidance escalated intergroup conflict.

研究分野：社会心理学

キーワード：集団間紛争

１．研究開始当初の背景

戦争，民族紛争，派閥間対立といった集団間紛争 (intergroup conflict) は古くより重要な社会問題である。研究代表者はこれまで集団間代理報復と呼ばれる現象を中心に集団間紛争激化メカニズムの解明に取り組んできた。

これまでの一連の実験結果は，内集団からの賞賛獲得という高い集団内評価を求めて代理報復が行われることが示された。この集団内評価の力学は，代理報復のみならず，集団間紛争一般に影響すると考えられる。集団内の社会的影響に関する研究によると，例えば多数派同調 (Asch, 1951) や規範からの逸脱 (Schachter, 1951)，協力行動 (Van Vugt, & Hardy, 2010) など，集団内評価を受けて人は行動を変化させる。また，攻撃行動は，観衆からの評価が大きく影響する現象である (Borden & Taylor, 1973)。集団間攻撃においても同様に，観衆からの評価は重要な役割を担うといえる。

そこで，これまでの研究成果から得られた賞賛獲得と集団間報復との関連性に関する知見を踏まえて，本研究では，集団間紛争における集団内評価の力学の解明を目指す。

２．研究の目的

集団内評価の力学が，集団間紛争にもたらす影響を検討する。集団内評価の力学には，主に次の２つの方向性が考えられる。

①賞賛獲得 (praise gain)
②排斥回避 (rejection avoidance)

①賞賛獲得とは，攻撃を行うことによる内集団からのポジティブな評価を得ようとすることである。つまり，“やれば褒められる”といった賞賛を獲得するための積極的集団間攻撃である。
それに対して，②排斥回避とは，攻撃を行わないことによる内集団からのネガティブな評価を避けようとすることである。つまり，“やらないと嫌われる”といった排斥を回避するための消極的集団間攻撃である。

この２つの過程は，内集団成員からの評価に基づく集団間攻撃であるという点では同じである一方で，その目標は異なるものである。そのため，①賞賛獲得による攻撃と②排斥回避による攻撃では，攻撃が生じる状況や心理過程が異なっていると考えられる。以上より，本研究では，賞賛と排斥の 2 つの集団内評価の力学が集団間攻撃に及ぼす影響へとアプローチしていく。

３．研究の方法

本研究では，集団内評価の視点から，賞賛獲得と排斥回避の 2 つの側面から，集団間紛争現象の解明を行う。

まず，賞賛獲得に関しては，既に申請者は，賞賛獲得が集団間攻撃を促進することを実験室実験を通じて，解明してきた。次の問題として，現実の集団間紛争において，実際に賞賛獲得と集団間紛争の関係性を明らかにすることが必要となる。そこで，本研究では，人類学領域で用いられる比較文化データベースを用いて，実証的検討を行う。

次に，排斥回避に関しては，集団間攻撃との関連は未だ十分には解明されていない。本研究では，日中関係を題材に取り上げ，他者の前での態度表出という視点から調査研究を行う。

４．研究成果

賞賛獲得に関しては，特に，集団間紛争場面における名誉文化の影響に着目して検討を行った。名誉文化とは，強いこと，タフであることという男らしさに社会的な価値付けが置かれている文化である。これまでの研究で，名誉文化での下では，男らしさを見せるために，侮辱に対して暴力的に反応することが示されてきた。これは，集団間紛争においても同様の役割を担うと考えられる。すなわち，名誉文化では，戦士に対して賞賛が与えられているために，その賞賛を求めて戦士が積極的に戦争に従事する結果，集団間紛争が増加すると予想した。

この予測を検討するために，本研究では，人類学領域で用いられる比較文化データベースを利用し，前産業社会における名誉文化，戦士への賞賛，集団間紛争の頻度に関して，社会レベルでの関連を検討した。

構造方程式モデリングによる分析を行った結果，モデルの適合性は高かった。名誉文化は，戦士への賞賛を通じて，集団間紛争頻度を高めるという関係が得られた。このことは，名誉文化の下では攻撃者である戦士が賞賛されているために，集団内の賞賛を得るために戦士が積極的に紛争に従事する結果，集団間紛争が増加したのだと解釈できるだろう。以上の結果は，Nawata & Yamaguchi (2013) の実験室実験場面で得られた知見と整合的な結果である。

以上より，現実の比較文化データの分析により，戦士への賞賛と集団間紛争の関連性が明らかにされたことから，本研究課題の主たる目的である，賞賛獲得が集団間紛争を増加させることが示されたといえる。

また，排斥回避に関しては，日中関係を題材に調査検討を行った。この調査では，中国人に対して，(1)日本人をどのくらい好きか，(2)中国人は日本人をどのくらい好きだと思うか，(3)中国人の前で日本人をどのくらい好きだと述べるか，を尋ねた。その結果，(1)個人の対日態度と比較して，(2)他の中国人の対日態度推測は非好意的なものであった。また，重回帰分析により関連性を見たところ，中国人では(2)他の中国人の態度推測が(3)他者前での態度表明意図に大きな影響があった。この結果は，中国人は周りの目を気にして日本を好きだと表明できないことを示している。

また，日本人においても対中国人態度を同

様に検討した。しかし，(1)個人の対中態度,(2)他の日本人の対中態度推測,(3)他者前での対中態度表明意図は，いずれも同程度の平均値であった。また(3)他者前表明意図への(2)他の日本人の態度推測の影響は小さかった。したがって，日本では中国とは異なり，他者前で中国を好きだと言えないという効果は見られなかった。これは，日本では，必ずしも反中国的規範が強いわけではないためだからだと考えられる。

以上より，中国人において見られる反日態度は，反日的な社会規範への同調としての側面の存在が示された。そのため，たとえ反日態度を内在化していない個人であっても，中国社会に存在する反日的な社会規範を敏感に察知し，それに同調した結果，反日的な態度が表明されることがあることが示された。

以上の賞賛獲得と排斥回避に関するそれぞれの研究知見をまとめると，集団間紛争において集団内の賞賛と排斥とがともに紛争激化要因として機能する可能性が実証的に示されたといえるだろう。集団間紛争と集団内力学との密接な関連に関しては，かねてより指摘されてきたものの(Brown, 1988; Sherif, Harvey , White, Hood, & Sherif, 1961)，実証レベルではほとんど検討されてこなかった (Petersen, Dietz, & Frey , 2004)。本研究は，賞賛と排斥の 2 つの集団内評価の視点から，これまで重要ながらも看過されてきた集団間紛争と集団内力学の関連性の解明を目指すものである。このことは，従来別々に発展してきた集団内力学研究（同調，規範，協力）と集団間紛争研究（攻撃，差別）を統合的に理解するための基盤を提供することができたといえる。ただし，調査手法も限定的なものであり，未だ解明されていない点も多い。今後さらなる研究が必要となるといえる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

本課題に関連する主要なもののみ挙げる。

〔雑誌論文〕（計 6 件）

・縄田健悟 (2015).“我々”としての感情とは何か？ ―集団間紛争における感情の役割を中心に― エモーション・スタディーズ,1, 9-16.

・縄田健悟(2014). 社会心理学から“集団”を科学する ―生理人類学との連携を目指して― 日本生理人類学会誌, 19, 257-261.

・Nawata, K. & Yamaguchi, H. (2014). Perceived group identity of outgroup members and anticipated rejection: People think that strongly identified group members reject non-group members *Japanese Psychological Research*, 56, 297-308.

・Nawata, K. & Yamaguchi, H. (2013). Intergroup retaliation and intra-group praise gain: the effect of expected cooperation from the in-group on intergroup vicarious retribution. *Asian Journal of Social Psychology*, 16, 279-285.

・Huang, L., Nawata, K., Miyajima, T. & Yamaguchi, H. (2015). Values and Hostile Intent Attribution to Out-Groups within China-Japan Relations: The Mediating Role of Perceived Threats. *International Journal of Psychological Studies*, 7, 97-107.

・黄丽华，绳田健悟，宫岛健，山口裕幸 (2015). 国家主义与情绪关系中对内危害意图的认知的中介作用 心理学进展, 5, 314-322.

〔学会発表〕（計 3 件）

・○縄田健悟・黄麗華・山口裕幸 (2013). 中国における社会規範としての「反日」: 中国人は他者の前で日本が好きとは言えない 日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会（北星学園大学） 2013 年 7 月

・縄田健悟 (2014). 国家間対立事象の討議における否定的態度の集団内相互強化過程：領土問題討議による実験的検討 九州心理学会第 75 回大会（宮崎公立大学）2014 年 11 月 15 日

・縄田健悟 (2015). 戦争における栄光の戦士：名誉の文化，戦士への賞賛，集団間紛争に関する比較社会的論拠 日本心理学会第 79 回大会（名古屋国際会議場）2015 年 9 月 24 日

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等
http://nawatakengo.web.fc2.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
縄田健悟（NAWATA, Kengo）
九州大学・持続可能な社会のための決断科
学センター・講師
研究者番号：30631361